毎朝飲んでいるコーヒーはどこで誰が作っているの？

コーヒーは、赤道をはさんで南北緯25度の間のコー ヒーベルトと呼ばれる熱帯地方の国々で栽培されています。
コーヒー農園の運営や栽培の方法によって、自然へ の影響やそこで働く人々の暮らしぶりが大きくちがっています。

コーヒーについている認証マークのいろいろ

コーヒーの生産地では、自然や人々に配慮したさまざまな取り組みが始まっています。
このようなコーヒーをサステイナブルコーヒーといいます。

フェアトレード
南北の格差解消を目指す公正な取引を行っていることを表すマーク。小規模農家を対象に生豆の最低買取り価格を保証することで、農家の収入安定を図っています。

レインフォレスト アライアンス
熱帯雨林や野生動物・水資源の保護、そこで働く人々の労働環境向上等に関する基準を満たした農園に認証を与えています。バナナや紅茶にもつけられます。

バードフレンドリー
渡り鳥の休息地となる森林を保護するという観点から、環境と動植物の保護に配慮された日陰栽培の有機コーヒーを認証しています。

グッドインサイド
コーヒーやココア等で、社会や環境に配慮した生産・供給・調達を行うためのプログラムで、生産から販売までの全過程を追跡する事ができます。

コーヒーの持続可能性と認証マーク

コーヒーは生物多様性に富み、豊かな自然を育む熱帯雨林の広がる途上国で作られている貴重な農作物です。コーヒーの価格は国際相場で決まり、投機の対象にもなるので乱高下が激しく、生産者の売値は生産コストを下回る場合もあります。そのため農園で働く労働者や小規模農家は、生活のための最低収入も得られず、子ども達も重要な労働力として働くことになります。また

コーヒーは元来半日陰で育つ植物であり、熱帯の原生林と共存する事は十分可能ですが、多くの農園は採算や効率を重視して、原生林を切り開き、日向栽培を行っています。熱帯地域の豊かな自然は、そこに住む人々の生活の保証なしには守れません。上記のマークはいずれも第三者認証マークです。どのマークもそれぞれの考え方に従って「働く人の社会的公平性」や「環境保全」等の基準を設けていて、基準を満たした農園に認証を与えています。また、同様の基準を自社基準としてコーヒー豆を買い付けている企業や、農家を指導援助する団体もあります。

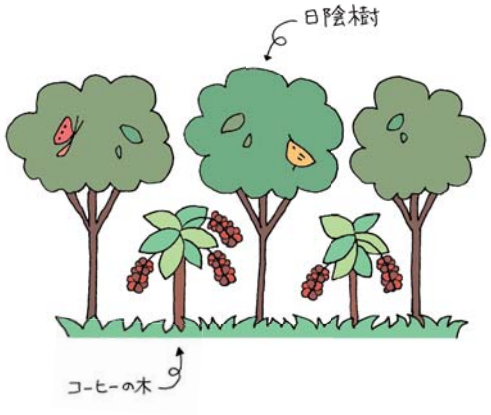
グアテマラのコーヒー農園を見て来たよ

グアテマラではコーヒーは重要な輸出農産物。
レインフォレスト アライアンスとグッドインサイドの認証を受けた農園に行ってきました。

＊視察期間：2009年11月19日～26日

日陰栽培のコーヒー

グアテマラでは98%のコーヒーが日陰栽培です。機械化ができず手間のかかる栽培方法ですが、日陰樹は直射日光や暑さ寒さ、霜などからコーヒーの木を守り、土壌中の湿度を維持します。雨季には激しい雨を受け止め、農園の土壌の浸食を防ぎます。

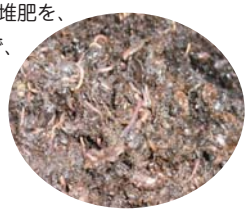


コーヒー農園の中の学校

農園で働く人の子ども達のための学校です。学校へ通うにはお金がかかりますが、ここでは農園が費用を負担するので、子ども達は無料で教育が受けられます。

有機肥料も自家製

農園では、牛をはじめヒツジや馬等が飼われています。ここでは牛フンを混ぜて作った堆肥を、さらにミミズが分解することで、より栄養豊富な有機肥料を作っています。



写真：NACS環境委員会

みんなが幸せになるコーヒーを選ぼう

消費者がコーヒーの一生に関心を持つことは、コーヒーが持つさまざまな環境負荷や人々の暮らしの問題を改善することにつながります。コーヒーを選択する時、生産地の持続可能な取り組みを示したマーク（p5参照）は大きな目安となります。

コーヒーと生物多様性

コーヒー農園の生物多様性はその日陰樹によるところが大です。もともとそこにあった熱帯雨林の森を日陰樹として活かした農園づくりをすることで生物多様性が保全されます。日陰樹の種類が多くなるとその木に寄り付く虫や蝶も多種になり、それらを食べる鳥や爬虫類等の小動物の数も増えます。また蝶や鳥はコーヒーの木に対しては受粉という重要な役割を果たします。

コーヒー以外の輸入農産物の生産現場にも関心を持とう

日本は食料の約6割を海外から輸入しています。輸出国には多くの途上国が含まれています。農場の中には有機JASの認証を取得しているところや、日本の企業が日本国内の農薬基準で管理しているところもありますが、まだ少数です。農場で働く人々の労働条件や労働環境、農場やその周辺の自然環境保全について、日本の消費者はもっと関心を持ちましょう。